

立命館大学理工学部 正 会 員 笹谷 康之

立命館大学理工学部 学生会員 ○江守 孝浩

1. はじめに

淀川水系沿川には歴史資源や土木構造物・豊かな景観が多数存在する。これら淀川固有の資源を有効に利用し、都市の固有性・独自性を創出するために景観整備の方向を示す1手段である「淀川歴史ミュージアム」を、淀川を軸線と捉えたネットワークとして構築していくことを本研究の目的とする。

2. 対象範囲とその概要

研究対象範囲を鴨川の三条から七条辺り、伏見街道、宇治川の天ヶ瀬ダムより下流側、淀川の淀川大堰（毛馬）より上流側と、旧淀川（大川、堂島川、土佐堀川、安治川）の水系を中心とした軸線とその沿川（沿線）に設定した。この軸線は、淀川が京坂を結ぶ交通路として利用されていた時の主要なルートの一つである。

淀川水系の特徴として、以下の4点が挙げられる。

- ・淀川水系は、淀川水系は過去から現在まで、流域の社会・経済・産業・生活などにその多大な恩恵を与え続け、近畿全体の発展の基盤となってきた。
- ・淀川水系は、今なお多くの貴重な自然環境を保持している。
- ・淀川は古代から主要な交通路として利用され、舟運が発達し、沿川の各地に文化が成立した。また、淀川の歴史は、洪水と治水工事の歴史と言い換え

ることもでき、土木工事の発展に寄与してきた。

- ・現在は、都市の中のレクリエーションの場として淀川河川公園が整備され、人々の生活に潤いを与えている。

3. 既存の歴史ミュージアム計画

既存の歴史ミュージアム計画として、「歴史街道」（近畿地区）、「瀬戸内ミュージアム」（瀬戸内海沿岸）、「歴史ロード」（茨城県水戸市）を分析し、これらに共通する事項を探った。本章での分析結果をもとに「淀川歴史ミュージアム」の基礎となる歴史ミュージアムの目的、ネットワーク構築の方法、整備・活用の方針を決定していった。

4. 歴史資源の把握とモデルエリアの決定

対象範囲における歴史資源を、歌枕・俳枕として歌に詠まれた地区 44、淀川両岸一覽・宇治川両岸一覽絵図に描かれた地区 69、パンフレット・ガイドブックなどから現存する観光資源や歴史資源を 134ヶ所（下表参照）抽出し、歴史資源マップを作成した。

この結果をもとに、景観整備の拠点となるべき「モデルエリア」を対象範囲内に 12 地区選出出した。12 地区は、高瀬川、祇園、伏見街道、伏見、宇治、淀、八幡・山崎、枚方、江口、毛馬、大川、中之島の各エリアである。

観光・歴史資源調査結果（種類別、時代別）

種 類	資 源 数
名所・要所・町など広がりを持つ地区	12
社寺・仏閣など観光・文化資源	29
歴史の場となった建物、また史実を記した碑、史跡	40
歴史資料が展示されている資料館、博物館、美術館	18
近代建築物	6
土木工事に関する資源（工事跡、構造物）	13
芸能関係の施設（舞台など）	4
憩いの空間、施設（公園など）	7
2項目以上に該当、その他	5
合 計	134

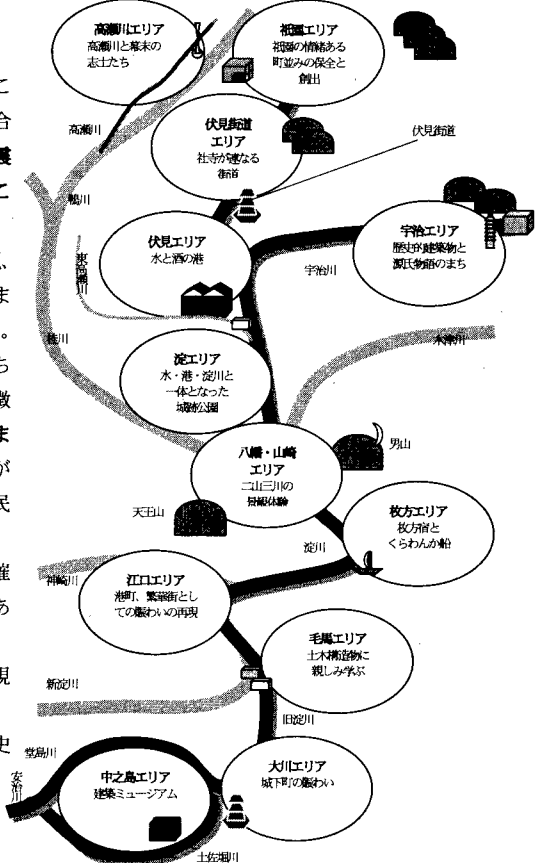
時 代	資 源 数
奈良・平安、それ以前	16
鎌倉～安土桃山前後	8
安土桃山～江戸前後	22
江戸時代	13
幕末～明治初期	9
明治中期～昭和初期	15
戦後	22
特定不能、不明	11
2区分以上の長い期間	18
合 計	134

5. 歴史ミュージアムの整備方針

[ネットワーク化の基本方針]

- ① 淀川水系の各河川をネットワークの軸と捉え、各地区を結ぶ手段として舟運を復活させる。この舟運は、交通手段というよりは観光の意味合いが強いが、その経験、ノウハウを元にし、震災など非常時には災害交通路として活用することも視野に入れる。
- ② 現存する歴史資源、土木構造物、建築物、景観、施設を最大限に利用することを念頭に置く。また、埋もれた歴史資源も積極的に復元していく。
- ③ 本ネットワークを、沿川市区町村にとってまちづくりの方向性を示す1つの計画と考え、特徴あるまちづくりを目指す。また、市民参加型まちづくりの1手段として住民が歴史に触れながら、確認しながら生活できる環境の創出を住民の手により進めていく。
- ④ ソフト面への提案も積極的に行なう。祭りや催しは、景観形成にとって非常に有効な要素である。
- ⑤ エコミュージアムとして「学び」の機能を重視する。
- ⑥ テーマの決定、場の復元、景観整備などには史実を尊重する。
- ⑦ 現在及び将来の社会・経済との最低限の整合性を確保する。

[モデルエリアと景観整備テーマ]

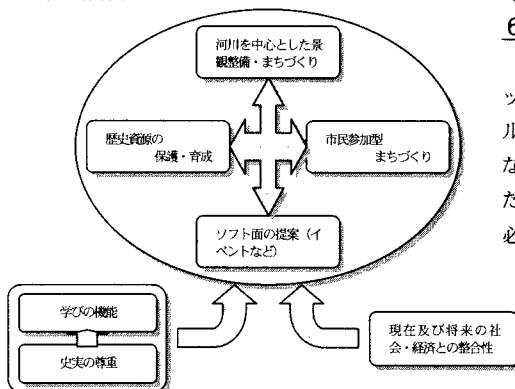


6. おわりに

本研究において、「淀川歴史ミュージアム」のネットワーク構築に向けた基本方針や、景観整備モデルエリアを選定することにより、淀川沿川には豊かな歴史資源が存在していることと、これを活用するために、河川を軸線としたまちづくりや景観整備が必要であることを示すことができた。

今後への展望としては、対象範囲を琵琶湖・淀川

水系全体へと拡大し、真の意味での1つの文化圏における「歴史ミュージアム」を構築していくこと、さらには、同様の「歴史ミュージアム」を日本の各地域・各文化圏において展開してゆくべきであると考え。この「歴史ミュージアム」の構築が、歴史文化を保護育成し、潤いある生活を実現する要素の1つとなりうる、「都市の固有性」が創出されるための基盤になることを強く望む。



[全体に共通するテーマ]

- ・歌枕と歌碑
- ・京坂間の舟運(過書船・三十石船)の宿駅
- ・秀吉ゆかりの地
- ・土木工事の今昔